

「呪的逃走」

— ユーラシアへの手がかり —

荻原 眞子

はじめに

アイヌの口承文芸ではユカラ（これにはカムイユカラ＝神話とユカラ＝英雄叙事詩がある）とウエペケレ（昔話）が大きな比重を占め、その特徴のひとつは一人称叙述の形式にある。一方、ウエペケレには三人称叙述形式の説話があり、それは「パナンペウエペケレ」、「和人昔話」、「隣の貧乏和人昔話」などと称されている⁽¹⁾。そのなかで「パナンペウエペケレ」、「パナンペ・ペナンペ」（川上の者・川下の者）として知られている一群の説話は、次のような内容の特徴とする。

「パナンペ（川下の者）がさまざまな経験によって富や福を得る。それを聞き知って、同じことを真似るパナンペ（川上の者）がその邪な心のために最後の土壇場で失敗をして悲惨な目に遭う」というものである。同じ構成でありながら、主人公がパナンペ・ペナンペではなく、「和人」である場合には「和人の昔話」として区別されている。また、パナンペ・ペナンペという対の

登場者が地方によつては役割が逆になり、失敗するのがペナンペという場合もある。

「パナンペ・ペナンペ」譚を集めた知里眞志保『アイヌ民譚集』には一三話が取められている。それについて関敬吾が優れた解説を付している。すなわち、「パナンペ・ペナンペ」譚の昔話群は「東北地方の『上の爺・下の爺』、南西諸島の『東長者・西長者』など、いわゆる『隣の爺型』と同型の昔話である」とし、「しかもこれらの昔話群はユーラシア型の昔話で、昔話の比較研究にとつては極めて重要である」と指摘したうえで、「一三話のうちの一〇話および付録の二話について比較を試みている」^(関 一九八一・二八三―二九七)。そこで比較検討された説話には中国、朝鮮のみならず、アジアの諸地域、ヨーロッパにも共通する説話やモチーフが明らかにされている。そのような特異なモチーフのひとつに、二種の「呪的逃走」がある。すなわち、「呪物逃走」と「変身逃走」であるが、この後者について、関は「これまでほとんど問題にされなかった古典神話研究の重

要な資料である」と指摘している「関 一九八一・二九〇」。本稿では、このことに関連してユーラシアの類例をいくつか挙げてみたい。⁽²⁾

一 アイヌの「パンンベ・ペナンベ」譚から

さて、問題の「呪的逃走」のモチーフは「パンンベの手足に浮袋がひつつく」(『アイヌ民譚集』第十話)にみられ、この説話は全体としていくつかの特異な挿話で構成されているが、関によれば、これは「鬼が笑う」と「三枚のお札」との複合型である「関 一九八一・二八九―二九〇」。

この話は概略以下のようなものである。

パンンベがあった。ペナンベがあった。ある日パンンベが食物を捜しに浜へいくと、一つの大きな皮袋があった。パンンベが非常に好ましく思つて右手でその皮袋をパンと撲つと手がひつ着いた。左手で撲つとそれもひつ着き、右足で蹴るとひつ着き、左足でけるとまたひつ着いた。パンンベは歩けなくなつて砂の上に転げ回っていると、そこへ大きな鬼が大きなかご(サラニップ)を背負つてきて、「俺のわなに漁のあること」と言つてパンンベを皮袋からもぎとつて、手足を縄で縛つてかごの中に入れて背負い、川上へ行つた。鬼の大きな家があつて、六匹の小鬼どもが留守居をしていた。

「美味しそうな人間の肉がかかつていたよ」と言いながら、パンンベを下ろして重さを試した。パンンベがわざと身を軽

くしたので、ひどく軽すぎた。鬼は「人間の肉を直ぐに煮て喰うはずだったが、あまり実がないので、晩まで炉の上におらさげておこう。よつく番をしておれ。どんな事をいつても決して解いてはならぬ」といいながら、大きなかごを背にして山へ行つた。

その後、パンンベは小鬼どもに「お前たち、解いてくれるなら、小さな弓矢を拵えてやるが」というと、悪魔というのは言われた通りにするものゆえ、縛めを解いた。パンンベは「さあ、親父の宝物を皆出して、見せる。そうしたら、小さな弓矢を拵えてやろう」と言うと、小鬼どもは親父の大切にしてある革製の小舟や、水のごとき鋭利な刃のついた太刀や、白い糸玉や、黒い糸玉を出した。「どういう具合に使えば好いのだ」とパンンベが訊くと、小鬼ども曰く、「この革の小舟は、ひろげると十人でも二十人でも乗つて海でも川でも沈まずにどこまでも逃げられるのさ。誰かに追つかげられた時、黒い糸玉を自分の後の方へ投げると、黒い雲が真つ黒にたちこめるのさ。白い糸玉は自分の前方へ投げると、行く手が明るくなつて何なく逃げのびれるのさ、それからこの刀は、どんな堅い木でも石でも一刀のもとに断つことができるのさ」と教えた。パンンベは心中大喜びで、「さあ順々に並べ、丈の高い者はそれに応じて、低い者はそれに応じて、弓だの矢だのを拵えてやるから」とパンンベが言うと、小鬼どもは信じて順々に立つた。パンンベは突然六匹の小鬼どもを一刀

のもとに斬った。小鬼どもの首は山芋のごとく転がった。

「イ」パナンペは大鍋に水を入れ、炉に大きな火をおこして、小鬼どもを細かく刻んで煮た。煮えたのでおろした。鬼の大切な宝物を懐に入れて、燗に化けていると、やがて鬼は空手で戻ってきて、家に入ると、小鬼どもは一人もいない。またそこらに遊びにいったのだろうくらいに思つて、鍋のそばへ行つてみるとお美味そうなお汁があつた。鬼はひどく空腹だったので、喰うわ喰うわ、とうとう鍋を空にして、後をなめると突然洗面つくつて「やあ俺の味がする俺の味がする」と言つて炉の上を見上げると、パナンペを縛つた縄ばかりがかかつていた。鬼は起ち上がり、宝物の入つてゐる箱へ行つて見ると、一つもない。「やあ憎いパナンペ悪いパナンペめが小鬼どもを騙して縄を解かせ、宝刀で殺して煮たんだな」と知つて、「憎いパナンペ悪いパナンペ、本当の巫者と聞き及ぶゆゑまだこの家にかくれているだろう」と言いながら、燗を数えはじめた。今にもパナンペを見つけそうにした。パナンペはまた灰に化けた途端に、鬼は燗を数えおわつた。それから灰を数えだした。今にもパナンペをみつけそうにした。パナンペは今度は家の壁なる茅のなかの一本の茅の棒に化けた途端に、鬼は灰を数え終つた。それからまた茅を数えはじめた。パナンペは呆れた。今にもパナンペを見つけそうにした。

パナンペはたまらなくなつて、「アハハイ」と笑い転げ

ながら大川に逃げ、走りながら革の小舟を広げ、それに乗つて逃げると、鬼は泳いで追つかけた。パナンペが後ろのほうへ黒い糸玉をなげようとすると、鬼はこの大きな川を呑みほした。鬼が二間三間ほど身近に迫つた時、パナンペは舟の中に立上がり、尻をまくつて鬼に向かつて突出し、「プツ、プツ」とまるで叫ぶように、つづけさまに放屁した。鬼は今

の今までそのような屁を聞いたこともないものだから、おかしくて笑い続けた。それと同時に、鬼の口から水がまかれて

ついに再び大川が流れだした。またもや鬼は追つかけた。
「口」パナンペは急いで黒い糸玉を後ろの方へ投げると、後ろにはまつ黒な雲が濛々と川の面を覆つた。パナンペの行く手は明るく開けていたので、革の小舟は水面を流れるように走つて、家へ着いた。鬼はまつ暗闇なので目が見えず、あてもなくやみくもに泳ぎ続けてとうとう疲れ死んでしまつた。

パナンペは革の小舟のつて沖へ出たり魚を捕つたり、沖へ出ると、刀が非常に利れるものだから鯨でも角鯨でもなんでも一刀のもとに斬り、一突きすれば直ぐ死ぬ。パナンペは赤肉白肉を家の内外いづばいにして、美食しながら裕ら暮している、そこへパナンペが戸口にきて、「同じく貧乏だったのに、パナンペよ、どうしてこんなに長者になつたのだ」と訊いた。

「口」この後、ペナンペはパナンペと同じことを繰り返すが、

鬼に追いかけて、逃げるときに余りにあわてたものだから、黒い糸玉を後ろへ投げたと思って白い糸玉を後ろの方へ投げ、黒い糸玉を前の方へ投げたので、鬼のいる所は明るく、ペナンベのいる所はまっ暗になる。まっ暗な霧の中にペナンベはいるのでどうすることもできなかった。鬼は大喜びでペナンベを捕まえて一呑みにしてしまった「知里 一九八一・八三―九五」。

二 「呪的逃走」 Ⅱ 「呪物逃走」と「変身逃走」の特質

この説話に見られる第一の「呪的逃走」はペナンベの「イ」「変身逃走」であるが、追跡者である鬼の対応の仕方が特異である。すなわち、

ペナンベが燠に化ける ↓ 鬼は燠を数える。

ペナンベが灰に化ける ↓ 鬼は灰を数える。

ペナンベが一本の茅の棒に化ける ↓ 鬼は茅を数える。

この場合の変身はいわば身隠れであつて、変身することがいつそう有利な身体能力の獲得にはなっていない。そして、追跡者はペナンベが巫者であることを知っており、その身隠れを見抜く特殊な能力を具えている。鬼が騙されないとともに、この変身逃走の興趣があるといえよう。後述のように、同様の身隠れ変身は、アイヌに近接するアムール・サハリン地域の説話にはしばしば認められる。

この説話に見られる第二の「呪的逃走」は呪物の放擲によつ

て、追跡者に障碍を設けて窮地を打開し、逃走するという「口」 「呪物逃走」であるが、ここでは呪物そのものが二色の糸玉であり、それが追跡者である鬼の所有物であるところに特徴がある。

ペナンベが黒い糸玉を後ろの方へ投げる ↓ まっ黒な雲が川面を覆う。

白い糸玉と黒い糸玉を取り違えたためにペナンベは破滅する。

すなわち、ペナンベが白い糸玉を後ろの方へ投げ、黒い糸玉を前の方へ投げたので、鬼のいる所は明るく、ペナンベのいる所はまっ暗になる。

典型的な「呪物逃走」(AT313, 314)では呪物(櫛、石、火打石など)を背後に投げると、それらが障碍物(森、山、火)になって追跡者の行く手を阻む。しかしながら、右の説話では呪物は黒い糸玉と白い糸玉で、黒雲が視界を遮るといふ設定であつて、障碍物は現れない。同じような呪物の玉は新潟で採録された説話に見られるが、そこでは典型的な障碍物が出現する。すなわち、説話「白い玉・青い玉・赤い玉」では、小僧は便所の神様から玉をもらう。白い玉は小僧の前では明かり、山姥の前では針の山、青い玉は湖、赤い玉は火になるが、それを投げるときに障碍物を念誦しなければならぬ。また、ペナンベ・ペナンベの場合と異なり、この三色の玉は「糸玉」とは語られていない「水沢 一九七二・二四五―二五一・五七三―五七六」。同様

に雪隠の「二つの玉」では、花摘みにいく小僧に和尚が与えた玉が火と泥海、いばらの山になる「水沢 一九七二・四五〇―二五四」。このような呪物にはそれ自体に対象物との連想がないか、あっても、せいぜい色（青は水、赤は火、黒は山）である。したがって、呪物の投擲だけでは、障碍は現れない。呪文は必定である。

このことは、本邦にひろく分布している「三枚のお札」にも共通する⁽³⁾。三枚のお札は具体的な事物ではなく、その呪力はお札に込められる呪文にあり、それによって障碍物（山、川、火）が登場するが、この障碍物は概して世界的に共通するものである。また、呪物の一つが逃走者の身代わりになって「話す」、つまり、代弁するということも「三枚のお札」の重要な特徴のひとつであることは看過してはならない。

さて、本邦の説話におけるもう一つの重要な「呪的逃走」は、いうまでもなく『古事記』に語られている挿話である。ヨモツシコメに追われる伊邪那岐命が黒御縷を投げると蒲子が生え、湯津津間櫛を投げると筭になる。追手がそれを食んでいる間に伊邪那岐は逃走するのであるが、やがて、八はしらの雷神に、千五百の黄泉軍が追ってきたときには、十拳の剣で追い払いながら、黄泉ひら坂で桃のみ三つを投げて追い返す。

この「呪的逃走」では放擲される黒御縷と湯津津間櫛はそれぞれ具体的な事物であり、黒みかづらは葡萄の実に、櫛は笥を生ぜしめる。この連関は類感呪術にもとづくように見える。

ただし、実際には黒御鬘や湯津津間櫛がどのようなものかは正確にはわからないが、ここで大事な点は放擲されたものが葡萄や筍という食べ物を創出し、追っ手がそれを食んでいる間に逃げるという時間稼ぎにある。それは山や海・湖、火など追っ手の前途を塞ぐ巨大な障碍物とは本質的に異なっている。食物を特徴とする「呪物逃走」は巨大障碍物の登場する「呪物逃走」とは異質のものとして検討されるべきであろう。

三 「変身逃走」Ⅱ「身隠れ変身逃走」・「競合的な変身逃走」・「変身競走」

右に挙げた説話「パナンペの手足に浮袋がひつつく」に見られる「変身逃走」の特徴は、パナンペが最初は燠に、次は灰に、そして最後は一本の茅の棒という微小なものに変身するのであるが、これはいずれも動けるものではない。そして、繰り返しになるが、相手の鬼はその変身を見抜いて、燠や灰、茅に変じたパナンペを見つけたそうとする。このような微小なものへのいわば「身隠れ変身」はアムール川流域のナーナイにも類例がある。

【身隠れ変身逃走】「二人のフジ（乙女）」（ナーナイ）

昔、二人のフジが住んでいた。あるとき、姉が「わたしたちには夫がない」という。そして、夜半に身体を洗い、きれいな服を着て、出かける。道の二又になっているところで、姉妹は別れ、妹は細い道を行く。ある川岸の家で水を乞い、

水を飲むと先へ進む。夜遅く別の家に着く。その庭には人骨が積み上げられているが、獣の骨だと思う。家の中に入ると、そこにも人骨がたくさんあり、七人の禿頭の兄弟が座っている。フジを見ると、「新鮮な肉にありつける」といって、人喰いたちはフジに飛びかかる。

フジは針に変身して炉の灰の中に隠れる。禿頭たちは石の糸巻（パンガファン）を使ってまじないをはじめ。「彼女はどこへ行ったか、家の中にいるのか、チェネ、チェネ、トウンクイ、どの変身術ですり抜けたか。」「彼女は針に変身して、灰の中に飛び込んだ。チェネ、チェネ、トウンクイ」と石の糸巻から聞こえてくる。禿頭たちは灰の中を捜して、針を見つける。フジは再び人間の姿になる。禿頭たちが襲いかかったので、フジは毛虫になって木の柱の中に潜り込む。七人の禿頭たちはまたしても石の糸巻を使ってまじないをし、毛虫を見つけた。フジが元の姿になると、再び禿頭たちが襲いかかったので、今度は一滴の血となって壁に飛びあがる。禿頭たちは再び、石の糸巻でフジの所在を突き止める。そこで、フジはアブに姿を変えて飛び去る。後から七匹のアブが追いかけてくる。……そこで、フジは百匹のアブの群となる。その虫たちは四方八方に飛び散ってから、また、一塊になる。禿頭たちはフジを認めて追ってくる。このようにして禿頭たちはフジをどこまでも追ってくる。夕方に一軒の家にたどり着く。禿頭たちはその家の魚の乾燥棚の横木にぶつかって動

けなくなる。……

ある日、マルガ（勇者）は狩に行かず家にいる。「悪魔たちが今日やってくる」という。昼近くに彼らは「チョコル、チョコル、チョコル……」と音を立てながらやってきて、「自分たちの獲物がこちらへきた」という。マルガはフジを火口にして、火打ち石用の袋の中に入れた。悪魔たちは石の糸巻で占いをはじめ。そして、フジの所在を突き止める。マルガは火打ち石の袋を指の間にはさんで（落とさずに）火口と火打ち石を地面に投げつけて、「さあ、フジを地面から拾い上げる」という。禿頭たちが石の糸巻で占うと、「ここに長居は無用、ひどい目に遭うぞ」という答えがある後略。[Lauter: 三三二—三三八・荻原一九九四・九七—九九]

アムール川地域のナーナイやウリチには一般に女性をブジないしはブジン（ここではフジ）とし、男性をマルゴ、メルゲン、ないしはムルゲン（ここではマルガ）とする英雄説話がある。右の説話では主人公は妹フジであるが、そのフジの最初の変身は針、毛虫、血という微小なものである。その変身を魔物の禿頭たちは石の糸巻を使って探し出そうとする。禿頭たちは人喰いの魔物であった。次いで、フジはアブとなって「変身逃走」、敵の人喰いたちも同じアブになって追跡する。やがて、フジはあるマルゴの家に辿りつく。マルゴはフジを火口に変身させて庇護する。この説話とパナンペの変身譚に共通しているのは、

逃走者の身隠れ変身とそれを見つけ出そうとする鬼や人喰いの呪的な超能力であるが、これはシャマニスティックな特徴とみられよう。ナーナイの説話にはこのような身隠れ変身はしばしば登場する。ここで石の糸巻がどのようなもので、どのような呪的な意味をもっているのかは、今のところ定かではない。

この説話におけるフジの第二の変身逃走はアブとなって逃走することであるが、その途中で無数のアブの群にもなり、追跡者の人喰いも同様アブになる。ここでは逃走する者と追跡する者とが同一のものに変身するが、ユーラシアの叙事詩ではしばしば追跡者は逃走者に比べいっそう強力な存在に変身することが顕著である。ブリヤトの代表的な神話「ゲシル・ボグドウ」には次のような連続的な変身による逃走が見られる。

【競合的な変身逃走】「ゲシル・ボグドウ」

(前略) それよりボグドウは、乳海の底へ行きて、そこに蔵してありし箱を發見し、これを開きたるに、一三羽のヤマシギ、パツと飛び出しつ。彼は僅かに、その一羽を捕ら得たるのみにて、他は空中へ飛翔し去りたり。彼よりて先ず、その一羽を殺し、自ら鷹に変形して、一二羽の後を追ひ、その中一羽を捉えて、これを殺したれども、最後の一羽は、地上に落下して稗黍に変じ、小粒の穂を垂れて、その広さ七エーカー半の地を蔽い、その粒毎に、その中にマンガタイの命を保持したり。ここに至りてボグドウは、九九羽の雌鷄に変形して、稗黍を食ひ初めつ。残るところ僅かに三粒となりたる

時、そのもの忽然として、三頭の猛き山羊になりて、森を指して走り出しぬ。その利那、九九羽の雌鷄は、三頭の灰色したる空腹の狼に変じて、二頭までその山羊を捕らえたれども、残る一頭は危地をのがれて海岸へ落ち延び、そこにて無数の小魚に変化したるを以て、狼はそこにて大鱈魚に変化して、その小魚を呑み初めつ。余すところ、ただ二尾となりたる先、そのもの共、海浜目がけて突き進み、沙上に飛び上がりて、二頭の猛烈なる山羊となりたるを以て、鱈魚今度は、狼に變じてこれを追躡し、その中一類を捕らえたれども、他は七羽の雲雀となりて、快速力を以て、空中を翔り廻りたり。

ボグドウは雷神に依囑して、石箭を造りて、雲雀の上に投ずべきことを求めしかば、雷神その乞いを容れて、ボグドウに一臂の力を貸しつ。箭の嵐さと襲い来りぬ。されど日光のさすところへは、雲雀突き入りて、矢の嵐を免れ居たり。兎角する程、ボグドウは、雲雀が日光に照らされて、空中にかかれるを見、乃ち自ら白鳥に変じて、彼らに向かつて突進して、遂にこれを捕らえたり。……

ボグドウは鳥を窒息せしめて、これを馬に与えつ。馬はこれを噛み殺したれば、マンガタイも死亡したり。ボグドウはマンガタイとその乗馬とを山の麓に埋めりぬ。「カーティン 一九一四・二六三

ゲシルはゲセルとも呼ばれ、モンゴル諸族では広く知られた

叙事詩の神話的な存在である。この説話ではゲセルが地上に跳梁するマンガタイと対決を繰り返す。マンガタイは悪を象徴する多頭の怪物であり、ゲセルの前には一〇頭、一七頭、五三頭などと次第に頭数の多いマンガタイが現れる。⁽⁵⁾ここに語られている場面ではマンガタイの変身に対してゲセルはそれよりもいっそう強力なものに変身し、追跡し滅ぼすが、この逃走譚で面白いことは変身する対象がマンガタイでもゲシルでも複数の存在になり、しかも、逃走するマンガタイは最後の二、二者が新たなものに変身して逃走を継続するという変身の連鎖が展開する点である。そうした変身逃走のなかに、梗黍という植物への変身が挟まれ、それに対してゲセルが雌鶏になるという対比は、このモチーフの広がりをおぼやかし、興味ある特徴である。⁽⁶⁾

(マンガタイの変身)

一三羽のヤマシギ

↕

(ゲシルの変身)

鷹

梗黍

↕

九九羽の雌鶏

三頭の山羊

↕

三頭の狼

無数の小魚

↕

大鱈魚

二頭の山羊

↕

狼

七羽の雲雀

↕

白鳥

このように逃走するものと追跡するものとが獣や鳥、魚など陸海空の生きものに変身する際に、追跡者が逃走者よりも強力なものに化す競争的な「変身逃走」は、特に、ユーラシアの諸民族の英雄叙事詩に広く認められる。⁽⁷⁾そして、多くの場合、語り手の心情はより強い変身者、つまり、叙事詩の主人公である

英雄の側に傾いていることは当然のことながら一般的な特徴である。

さて、話は前後するが、厳密には「変身逃走」というよりは「競走」がユーラシアの諸民族の叙事詩では求婚・婚姻と結びついている場合がある。次の例はサハリンのニヴフの神話であるが、ここでは逃走者と追跡者の変身は同種ではあるが、雌雄の動物になる。

【変身競走】 「二羽の四十雀」(ニヴフ)

金の小鳥は上り、弟四十雀は上り、上天へ上ると金の小鳥はそこに止まった。四十雀はその傍に上り、自分の羽で金の小鳥を打った。見ると、彼女は大きな雌熊に化身して走りだした。四十雀は雌熊に化してその後を走りだした。すると雌熊は川へ降りて行き、岸に寝そべった。雌熊は「走るのはおしまいかい」といって、雌熊を掌で打った。すると、今度は雌アザラシに化して走りだした。四十雀も雄アザラシになってその後を追った。しばらくすると、彼女は再び立ち止まった。傍までくると、「走るのはおしまいかい」といって、手の平で打った。すると、今度は魚の「ゴイ」になったではないか。四十雀も同じように雄魚に化けて泳ぎだした。それから雌魚は岸にたどりつき、上がって、寝そべった。四十雀は「さあ、もつと走りなさい」といって、近づいて噛みついた。すると彼女は今度は女になって走りだした。四十雀は今度は人間になつて彼女の後を追ひ、ユルタの中に入った [Ulthephoopi:]

次のアジアエスキモーの説話には「変身逃走」と「呪的逃走」のモチーフが結びいている。この「嫁に行きたがらなかった娘」の説話は、結婚を忌避する娘を主題とする説話で北東シベリアのパレオアジア諸族に広く散見される。その内容は求婚者を片っ端から退けたために、家族と離反することになった娘の後日譚である。カナダからグリーンランドのイヌイット（エスキモー）に共通する海獣の母「セドナ」の説話は、この説話群に位置づけられる。

【変身・呪的逃走】「嫁に行きたがらなかった娘」（アジアエスキモー）

（後段）白熊の妻になった娘が夫から逃げようとする。小さなお婆さんがやってきて、自分の毛皮を貸してくれ、知恵を授ける。その毛皮を着ると、狐になる。白熊の夫が追ってくる。お婆さんの教えたとおり、白熊が間近に迫ったとき、燃えさしで氷原を撫でると、広い水面ができる。二度目には思いきり氷原を撫でて、燃えさしを突さすと、向こう岸が見えないほどの大きな水面ができる。湖水を泳いで白熊は追ってくる。最期にいよいよ白熊が追いつきそうになったとき、娘の狐はアザラシ狩をしている獵師たちの側を通って、裏手の山の岩陰に隠れる。獵師たちが、熊を殺す。娘は狐の毛皮を脱いで、両親のもとへ帰り、悔悛する [Менюинов 一九七四：№15]。

この説話の「呪的逃走」では、呪物は炉の燃えさしである。これはパレオアジア諸族では説話ばかりでなく儀礼の場でもある種の「呪的」な力をもつものとして登場する。創出するのは二度とも水面であるが、それは冬季に一面氷原と化す極北地域の自然を背景としているからである。

四 「呪物逃走」・「おとり呪物逃走」

パレオアジア諸族でも、エスキモーよりは南、カムチャトカ半島を住地とするコリヤクの神話にはユーラシアに典型的な呪物逃走がみられる。ここに登場する大ワタリガラスは（クイキニヤーク、クルキルなどの名があるが）、神話をはじめ多様なジャンルの説話のなかで主要な存在であり、創造神、文化英雄、トリクスターなどさまざまな相貌を帯びている。この大ワタリガラスには妻ミチ、息子エメモクツト、娘イネアネウトの家族と甥や姪があり、この家族たちにおこるさまざまな出来事のエピソードが全体として「ワタリガラス話群」(Raven cycle)と呼ばれている。

【呪物逃走】「妬みやと狼」（コリヤク）

大ワタリガラス（クイキニヤーク）が息子のエメモクツトと暮っていた。あるとき、娘のイネアネウトと姪のキルとがベリーを摘みにゆく。キルが帰ってきて、「イネアネウトが木切れと結婚した」という。エメモクツトはそこへ行って、

木切れを細かく折る。翌日、二人の娘はまたベリーを摘みにいく。キルが帰ってきて、「イネアネウトが犬と結婚した」という。エムムクットはそこへ行って、犬を殺す。三日目にはイネアネウトは一本の木と結婚し、四日めには「狼の手袋、帽子、ズボンをはいた男と結婚したい」というと、そのような男が現れ、結婚する。男の名は「妬みや」であった。二人には男の子が生まれる。

イネアネウトが家族といっしょに親元へ里帰りをする途中、吹雪で道に迷い、狼の家に泊まる。狼たちは翌朝彼らを喰おうとする。狼が寝込んだ夜半に、家を逃げ出す。翌朝狼の一群が追ってくる。イネアネウトは懐から小石を出して、それを投げる。と、道に険しい岩山ができる。狼たちは足を傷つけ、大勢が死ぬ。残った狼たちがまた追ってくる。イネアネウトはカラマツの木切れを取って、それを投げると、深い森になる。そこで狼たちは退散する [Jocheison: No84]。

【呪物逃走】「エムムクットと狼」（コリヤク）

エムムクットがある日妻といっしょに従兄弟の大明り（ケスキニヤーク）を訪ねにいく。道に迷って、狼の村に入る。狼を恐れて逃げる。狼の追跡を逃れるために、エムムクットは懐から木切れを出して投げる。それが深い森になる。次に小石を投げる。すると高い切り立った山になる。しかし、狼たちはそれを乗り越えて追ってくる。エムムクットが眼のつ

いた矢を射ると、それが狼たちを全滅させる [Jocheison: No 38]。

この二つの説話では呪物逃走はそれぞれ二回だけ、しかも呪力のありそうな特別なものではない。また、「エムムクットと狼」では三度めに投げられるのは有眼の矢である。この特異な矢はサハ（ヤクト）やそれに隣接するエヴェンキの英雄叙事詩にも登場し、最終的に逃走者に命中してそれを滅ぼす。これは現代社会の最新兵器にも通ずる発想とも言えるが、この矢はそれ自体に呪力があり、投擲によって何か障礙物が生ずるわけではない。その点では伊邪那岐が黄泉の国から逃走する最後の段で、「黄泉比良坂に在る桃子三箇を取りて、待ち撃てば、悉くに逃げ返りき」という挿話に通じないであろうか。

【おとり呪物逃走】（アタランタ型）

古事記の「黄泉の国」説話における前半の呪物逃走についてみるなら、確かに、投擲される黒御縷や湯津津間櫛には呪力が付与されているかのようで、追っ手の前には蒲子（葡萄）が生じ、追っ手が「是を撫ひ食む間に」、つぎには筍（たけのこ）が生え、追っ手が「是を抜き食む間に」伊邪那岐は逃げる。追跡者の眼前に生じたものは障礙物というよりはおとりのような性格のものであり、追っ手がそれを拾っている間に逃走する。このタイプの説話はアタランタ型 (R231) として分類されており

【Thompson vol. V: 290】「いくつかの類話があるらしい (D671: F381.2.1; H331.5.1.1)」。それに照らしてみると、北方ではコリヤクの次のようなプロットを挙げることができる。

【おとり呪物逃走】「小カマクは如何にして銚綱に変身したか」(コリヤク)

腹の空いた子供のカマクが大ワタリガラスの食糧庫に忍び込んで、罠にかかる。クイキニヤクはさんざん獲物をからかい、ついに小カマクを銚綱に変える。霧男たちがきて、小カマクの銚綱を盗もうとするが、小カマクが叫んで急を告げ、失敗する。海岸に住んでいる者たちが小カマクのことを聞き知ってやってきて、小カマクの銚綱を盗んでいく。

エムムクットは木で鯨を作り、そのなかに入って海岸の者たちの村へ行く。鯨が現れたというので、村人たちが銚を投げ、小カマクの銚綱も投げる。エムムクットはそれを奪って逃げる。追ってくる舟に「ベリー (Rubus Arcticus)」を投げ入れると、追っ手たちは鯨捕りの代わりに、それを食べる。その間にエムムクットは帰ってくる。

大ワタリガラスはその後二度と銚綱を家の外に広げたりしなくなった。それだから、それを盗もうという企みもなくなった【Jochelson: №98】。

この説話でカマクとは大ワタリガラスやその家族たちに対峙する悪霊・人喰いである。霧男は霧の擬人化である。しかしな

がら、厳密にはこれが「呪的逃走」に当たるかどうかは問題であろう。なぜなら、追っ手の前に投げられたのはベリーそのものであるらしく、呪的なものがベリーを生ぜしめたわけではないからである。⁽⁸⁾しかしながら、このタイプの逃走譚は「呪的逃走」の多様性とその関連を考える上で重要な示唆を与えようである。

五 「天からの呪物」

「三枚のお札」では呪物であるお札は和尚から与えられる場合と雪隠の神からの場合などがある。また、櫛が語られる場合には母からの形見であるとか、母からという説明になっている。白・青・赤の玉は「べんじよのかんさま」からである。「水沢一九七二・二四八―二四九」。アイヌの説話では黒・白の糸玉は鬼の所有物であった。これまで取り上げてきた北方の諸民族の例では、呪物の由来は必ずしも明白ではない。石や木切れなどについては特に言及されなくとも、聴き手にとって違和感はないであろう。呪物を下賜するものについて、西シベリアのケートでは太陽の女神が登場するが、この説話は月の生成を説いている。

【天からの呪物】「月と太陽」(ケート)

昔々地上に兄と妹がいた。両親は亡くなっていた。二人は孤児だった。大きくなり、元気に暮らしていた。兄は家(チュム＝円錐形の天幕)の辺りを歩き回るのに飽き飽きした。世

界を見ようと思つて、家から遠くへ歩いていった。どんどん行つて、誰がどこでどんな風に暮らしているのかを見た。

ところが、天のずっと高いところには太陽の女が暮らしていた。女は独りであるのがつまらなくなつた。あるとき、見ると、地上を男があちこち眺めたり、空を仰いだりしながら歩いている。太陽の女はこう思つた。「なんて素敵な男が地上を歩いて、わたしを眺めていることだろう。あの男をこの天へ連れてこなければならぬわ。でも、どうしたらいいかしら。わたしは高いところにいるし、あの男は地上の低いところだし。」

太陽女は男を連れてくるにはどうしたらいいのか知恵を授けてくれるように天に頼んだ。太陽には長い腕があり、難なく地上に手ごとく。朝起きると太陽は両手を伸ばした。どんどん伸ばすと地上に届いて、地上は明るく、暖かくなつた。男は下の地面を歩いており、太陽はその方へ両手を伸ばしたので、熱が男に降りそそいだ。「どうしてこんなに熱くなつたのだらう。楽になるだらう」と思つて、男は地面に横になつた。男が地面に横たわっていると、太陽女はその方へ自分の長い手を伸ばしてどんどん近づき、男に手が届くと掴まえて天へ連れて行つてしまつた。

男は天で暮らすようになった。一週間いると太陽にこういつた。「この天であなたといふのは全くよろしくない。わたしは大地の人間だから、こんなに高いところでは暮らせ

ない。わたしを下の地面に帰してくれ。」男は下に残してき自分の妹のことを思ひだしたのだ。男はさびしくなり、妹がかわいそうになつた。「あの子はわたしが居なくて、独りきりでどうしているだろう。」

太陽は男にこう答えた。「どうして、戻るのですか。あなたは前に、地上を歩きながら、『天には太陽が棲んでいる。きつとあそこはすばらしいだらうな。太陽女はどんななか知りたものだ』といつていたのを覚えていますか。それなのに、今は地上に戻りたいのですか。」男はがんばつた。「行かせてくれ。わたしは地上に忘れ物をした。行かせてくれ。忘れ物をとつたら、戻ってくる。」「戻つてはこないでしょう。行つてはならない。地上は良くない。悪霊があなたを食べるでしょう。」ところが、男は太陽のいうことに耳を貸さず、言い張つた。「行かせてくれ。戻るから。」太陽は泣きそうになりながら、「帰つてはこないでしょう。地上では悪霊があなたを食べるでしょうから、わたしはまたここで独りぼっちになるわ。」

とうとう、太陽は男を説得できないと分かり、短い間だけ帰す決心をした。「いいわ、あなたに悪霊除けにわたしがもっているものをあげましょう。砥石と櫛です。さあ、行きなさい。」男は喜んだ。「泣くな、太陽よ、わたしは戻る、必ず戻る。」太陽女が足踏みをする、翼のついた馬が現れた。その馬と砥石と櫛を男に与えた。男は馬に乗つて飛び立つた。どれほど飛んでいたのか、二年か三年か……分からない。自分の

ところへたどり着くと、その上を何回かぐるりと回って、自分のチュムを見つけた。ところが、男が天で暮らしている間に、悪いホシヤダム（魔女）が妹を喰って、自分が妹になりすましていた。

さて男は翼のある馬で地面に降りると、馬を木につないで、チュムに走っていった。チュムには妹がいて、兄をみて喜ぶ様子だった。鍋をもつて川へ走っていき、水を汲んでくると、鍋を火にかけた。兄に料理をしはじめた。チュムから外へ出ると、馬のところへいってその後脚を切り、それを鍋のなかに入れた。

兄妹は座って語り合い、喜びあつた。突如として兄は鍋から馬の脚がつき出ていることに気がついた。兄は自分を迎えてくれたのが妹ではなく、悪いホシヤダムだと分かった。鍋から馬の脚をつかみ出すと、馬のところへ駆け出した。馬に乗って、悪いホシヤダムから急いで逃げようとした。ホシヤダムは自分も殺すだろうと思つた。でも三本脚の馬でどうして走れるだろうか。どうしよう？あわてて四本めの脚をつけてもちゃんと着きはしない！だが、ともかく、切られた脚を馬にくつつけた。ホシヤダムが追つてきた。

馬はたいへんだつた。脚の具合が悪くて走れない。そして倒れた。男は馬をおいて、駆け出した。だが、馬でなければ、遠くまでは走れない。天を見上げると、太陽女が悲しそうに眺めていたが、気がつくとも、男には馬がない。ホシヤダム

はもう男に追いつき、手を伸ばして捉まえようとしている。

男は太陽女がくれた砥石のことを思いだして、それを後ろに投げた。地面から大きな山がもち上がり、自分とホシヤダムの間に立ち塞がった。ホシヤダムは怒りくるい、石を投げ飛ばし、山を歯でかみ砕く。男は走りつづける。山をかみ砕くと、ホシヤダムは大急ぎで追ってくる。もう少して男を捉まえようになつた。

男は太陽からもらつた二つめの贈りもの、櫛のことを思いだして、それを後ろに投げた。ものすごい森が生え出てきて、通り抜けることも這い出ることもできない。ホシヤダムは樹を一本ずつかじつて、倒している。男は走りつづける。どれほど走つたかわからない。寒くて、お腹が空いて、力が尽きそうだった。ところが、ホシヤダムは森を抜け出てくると、男に追いつき、腕を伸ばして今にも捉まえようになつた。太陽は見えていた。たいへんだ、あとほんの少してホシヤダムが男を奪つていってしまう。太陽女は光の腕を伸ばして、男の片足を掴んだ。が、遅かつた。ちょうどそのとき悪いホシヤダムが男のもう片方の足を掴んだ。二人は男をそれぞれの方へ引っぱつた。太陽は自分の天のほうへ、ホシヤダムは大地のほうへ。引っぱつて、引っぱり合っていると、男は二つに裂けてしまつた。

太陽は男の半分、心臓のないほうしか取り返せなかつた。太陽女はそれを天へ持つていって、何とか男を生き返らせよ

うとしたけれど、できなかつた。すっかり元気な男になって、翌日は生きていても、また、死んでしまう。心臓の代わりに炭を入れると、一週間は生きているが、ふたたび死ぬ。太陽女はさんざん苦勞して、すっかり気がおかしくなり、泣いた。とうとう、こう云つた。「わたしにはもうできないわ、どうしようもないわ。天のあちらへ行つておしまい。もうあなたには会わないでしよう。ただ、一年で一番長い日だけ会うことにしましょう。わたしはあなたの目を見、あなたはわたしの目を見るでしよう。」そう云うと、太陽女は男の心臓のない半分を天の反対側の暗いほうへ投げた。男はそこで月になつた。

こうして、今でも天では冷たい月がめぐっている。というのは、月には生きた心臓がないからだ。そして、月と太陽は一年中会うことがない。男のもう半分、心臓のあるほうはホシヤダムが持つていつてしまつた [Алексеенко 二〇〇一：五八—六〇]¹⁰。

さて、この説話の骨子が「孤児—魔物の追跡—太陽神の庇護—月の生成」であるとするなら、その類例として浮かび上がるのは、「天道さん金の鎖」の後半である。つまり、山姥に追われた兄弟は門の前の木に登る。「門の前の池に兄弟の影がうつっている。山姥は網をもつてきてすくおうとするがすくえない。見上げると兄弟は木の上にいる。山姥は木にのぼろうとす

るが、滑つてできない。山姥が『どうしたら上れるか』と叫ぶと、弟が怖くなつて『ぎざをつけると上れる』という。山姥は納屋から鎌をとつてきて、ぎざをつけて上つてくる。兄弟は窮して「天の神さん、かねでも鎖でもさげてくれ」と祈る。すると、金のくさりがするすると下りてくる。兄弟はそれを伝つて上つていく。山姥が「天の神さん、かねでも縄でもさげてくれ」というと、腐れ縄が下りてくる。山姥がそれにつかまつて天に上ろうとすると、縄が切れ、地に落ちる。そのとき、血が蕎麦の根についた。それで蕎麦の根は赤い。兄弟は天に上り、兄は月に、弟は星になつた」[関 一九九五：一一三—一一五]¹¹。この説話は地方により天に上つた子どもについて、「兄弟が星になる、姉妹が月と星になる、男の子は太陽、女の子は月になる、兄弟が太陽と月になる、兄弟が月になる、兄弟が明けの明星、宵の明星となる」などのヴァリエーションがある[関 一九五五：一一七〇—一一九二]。一般に共通しているのは、蕎麦の茎が赤いという由来である。それはそれとして、ケートの説話における太陽女の腕、すなわち光芒は本邦における説話の天からの鎖と同等に考えられないであろうか。

六 検討すべき問題

アイヌのウエベケレ、「三枚のお札」、『古事記』の「黄泉の国」にみられる「呪的逃走」を手がかりにユーラシアのごく一部の資料との比較検討を通じて、いくつかの問題が浮上してきたと

考えられる。

①「三枚のお札」については、一部にお札ではない別の呪物が語られるが、重要なことはそれに込められる呪文である。それは、語りにおける不可避の要素である。なぜなら、お札そのものには創出するものとの類似が皆無であるからで、これがこの説話のもっとも顕著な特徴といえよう。

②「三枚のお札」で雪隠の「柱」が小僧の代弁をする。呪物が話すことについて今のところ管見ではユーラシアの説話に類例は見あたらない。しかし、トンプソンの話型分類では D670、D1611、R220 に記載がある。ついにながら、

③この日本の説話では雪隠の神が小僧の庇護者であることも、大きな特徴となっている。

④説話の主人公に呪物を与えるのが誰であるのかということも、また、比較検討の要点のひとつになろう。西シベリアのケートの月の生成説話では地上の人間に呪物を与えるのは太陽の娘である。この話は多少の変容をへてユーラシアに広がりをもっているらしく思われる。そして、空間的には大きな隔たりがあるとは言え、説話の構造からみるとケートの話と本邦の「天道さん金の鎖」の後段は極めて類似していると言えよう。

⑤呪物そのものについて言えば、諸民族の居住する地域的な特質、社会文化的な背景が説話のなかの呪物と深く関連している場合があり、特異なものが登場する。しかしながら、一般的な呪物は石や砥石、櫛、火打石などで、それによって山、森、

火が出現するのは、その類似にもとづく、いわば類感呪術である。特異なものとして、アジアエスキモーには燃えさしが水原に巨大な水面を生ぜしめ、また、モンゴルの馬頭琴伝承の一話では、「鞍紐、鐙、鞍を投げると、それが藤、沼、山になる」「藤井 二〇三・二〇」。そのいずれの場合にも、出てくるものは気宇壮大な自然の障碍であり、それが追跡者の前途を阻む。

⑥これと対照的に、創出されるものが食物であり、追跡者はそれを取って食んでいる間に逃走者が時間を稼ぐという例は『古事記』の外に数例あることが明らかにされている。この「アタランタタイプ」(R231) にはりんごやバナナの例が示されている [Thompson vol.5: 二九〇]。本稿では、北東シベリアのコリヤクの例を取り上げたが、この「アタランタ型」については、さらに注意を払うことが求められよう。

⑦アイヌのウエペケレでは黒と白の糸玉が使われ、それによって生ずるのは明闇である。これもまた、「呪的逃走」では例外的である。一方で新潟の伝承では青黒赤、もしくは、青白赤の玉は一般的な自然の障碍物を創出ししている。

⑧アイヌの「パナンペ・ペナンペ」譚では逃走者が呪物を投げ誤り、自らの行く手を遮って自滅するという「逆転」に落ちがある。これもまたトンプソンの分類では D673 として例がある [Thompson vol.2: 七八]。

⑨呪的な変身を伴う「変身逃走」については、(ア) 微小なものへの「身隠れ変身」、(イ) 逃走者と追跡者と同じ類のもの

のに変身して逃走劇を繰り返す「変身逃走」、(ウ) 追跡者が逃走者より強力なものに変身する「競合的な変身逃走」を区別することができよう。(ア) の「身隠れ変身」は例に取り上げたアイヌのウエベケレに特徴的であり、ここではパナンベが燻、灰茅に化ける。これについて関は次のように指摘している。「この変身逃走は最近に翻訳された外国童話からの借用ではないかと思われる例が新潟で記録されたほかはほとんど知られていない。」¹²⁾「関 一九八一・二九〇」この挿話で見逃してならないのは、不動のものへの変身を見抜き、逃走者を見つけ出そうとする追跡者の特質である。それはシャマンの資質といつてよからう。その傍証はアムール・サハリン地域の類話の比較から得られる。(イ) 逃走者と追跡者とが同種の動物に変身して天地水界を移動するモチーフはもともと一般的な「変身逃走」譚である。しかしながら、同種ではあっても雌雄の別があり、女性が追跡される場合には、それが求婚の一場面として叙事詩のなかのクライマックスをなすことがしばしばある。これについては、また、ユーラシアの諸民族の叙事詩で注目すべき課題である。(ウ) 「競合的な変身逃走」では逃走者と追跡者とが異種の動物や鳥に変身して逃走・追跡を繰り返るのであるが、多くの叙事詩では当然のことながら、追跡者のほうがより強力である。また、(イ) の「変身逃走」の場合にも、この「競合的な変身逃走」の場合にも、変身は次から次へ異種の動物に連続的に生じる。特に、ブリヤットのゲセル叙事詩での特徴はマンガタイが複数の

鳥獣に変身し、その大部分が滅ぼされた後に生き残ったものがさらにまた複数の動物に変身するという連鎖にある。しかしながら、それは存在の具体的な現象の変化ではなく、生命の根源である靈魂の変化(へんげ)である可能性が大きい。

このように「呪的逃走」には、かなり多様なヴァリエーションがあり、それがユーラシアの諸民族の口承文芸ではさまざまに異なるジャンルに埋め込まれている。日本における「呪的逃走」について全体的な見通しをつけるためには、そのようなヴァリエーションをもつ「呪的逃走」をユーラシアの諸民族の口承文芸のなかから掘り起こさなければならないであろう。

注

(1) 例外的ではあるが、萱野茂『カムイユカラと昔話』にはパナンベが「私は」として一人称叙述体で語る話が二話掲載されている。

(2) Basil Hall Chamberlain: 一八八八には『Panambe and Panambe Cycle』として、五話(三二一―三七)が収録されている。そのなかには「呪的逃走」のモチーフはみられない。

(3) 「三枚のお札」については、「剣持 一九九六」、「飯倉 一九九三」に詳細な検討がある。

(4) 「縛」にはカズラの意はないが、鬘に通わし用いたものと思われる。書紀には「黒鬘」とある。鬘は頭の飾りにかけ

るもの」〔倉野・武田 一九九三・六五〕。クロミカズラは「蔓草の一種。イザナキはそのツルを束ねて冠として頭にかぶっていた」〔三浦 二〇〇六・四七〕。ゆつつま櫛の「ユツは『神聖な』の意、ツマ櫛は爪の形をした櫛をいう」とある〔三浦 二〇〇六・四七〕。

(5) 別伝では十二首、十五首、十八首、二十一首などのマンガタイ(魔王)が登場する〔若松 一九九三〕。

(6) ここで付け加えておかなければならないことは、変身をくりかえしているのはマンガタイの存在の本源、すなわち、霊魂である。この一節の冒頭「乳海の底に蔵してありし箱」とあるのは、その中にマンガタイの霊魂が秘匿されていたのである。このような存在の二元論的な観念はモンゴルから東のアムール川地域の諸民族に広がっている英雄叙事詩・英雄説話では共通した特徴となっており、闘いの場面ではいかに眼前の相手を傷つけようともし死に至らしめることはできない。どこか他所に在る霊魂を探しだして、それを滅ぼさなにかぎり、敵を滅すことはかなわないのである。

(7) 競合的な「呪的逃走」に関連しては、古代スキタイの造詣における典型的なモチーフ「動物意匠」(animal motif) が連想される。その特徴は羊、山羊などを猛禽や猛獣が襲っているきわめてリアルな情景が高度に図案化されていることにある。

(8) 同様に厳密には「呪的逃走」とは云えないが、ケートの神話的な存在「カイグーシ」にかかわる伝承にも「おとり」をもうけて、逃走する話がある。

〔川上のカイグーシ〕

川上のカイグーシが、人間の女をさらってきて結婚し、熊の息子が生まれ、育てる。熊は大きくなると、自分も人間の女と結婚をするという。そして親の反対を聞き入れず、シマリスの毛皮一〇〇枚の束、オコジョの毛皮の束、イタチの毛皮の束、リスの毛皮の束、テン皮の束、ウサギの毛皮の束、オオカミの毛皮の束、クズリの毛皮の束を持って人間の世界へ降りていく。カイグーシは暗い森のところで老人のテントにやってきた。その娘が川へ水汲みにきたとき、娘をさらって逃げる。

行方不明になった娘を老人夫婦は探し、熊にさらわれたことが分かると、仲間と追跡をはじめた。カイグーシは娘を背負って逃げ、背後にはシマリスの毛皮を置く。追っ手の仲間は父親に「シマリスの毛皮がある」と言うが、老人は振り向きもしない。こうして、カイグーシが次から次へと持ってきた毛皮の束を置くと、その都度、追っ手と老人は立ち止まり、思案するが、その毛皮を取り上げずに追跡を続ける。ついに、カイグーシは老人には自分が必要なのだと

悟り、娘を降ろすと、老人たちに立ち向かい、殺される。こうして、カイグーシは骨になって親の元へ帰った。[Алексеенко 二〇〇一：№56]

この説話では毛皮の束は娘・花嫁の代償、すなわち、婚資である。熊のカイグーシが父老人に提供した毛皮の束は拒絶され、追跡は止まることがない。

(9) 「異界の女性から、再来することを約して馬をもらい、地上世界の妻のもとへ戻るが、そこで馬の脚を切り取られて、不測の事態に陥る」という話の類話はモンゴルの叙事詩「馬頭琴伝承」にも認められる。その一話は概略つぎのような内容である。

昔、東の地方にフフー・ナムジルという美男で歌上手の男がいた。彼は兵役で西の国境へいった。あるとき、ナムジルは馬で出かけ泉のほとりで馬に水を飲ませた。すると、その湖から緑衣の美しい女が現れ、ナムジルを自分の黒馬に乗せて自分の両親のもとへ連れていった。ナムジルはこの女と結婚し、いっしょに暮らすようになった。その後、故郷に両親と妻を残してきたこと思い出し、帰るが、女は特別な葦毛の馬を贈って、「これに乗れば、昼は両親のもとで過ごし、夜にはここへ戻ってこられる」という。

ナムジルはこうして、毎夜湖の女のもとへ通い、明るくなると戻ってくる。三年がすぎ、夜毎に出かけては

帰ってこないことを不審に思った妻は、ある日、家から出てきて、まだ翼をたたんでいない馬をみつけ、その翼を根元から切り落とした。

馬は息絶えた。ナムジルは嘆き悲しみ、馬頭の彫刻のついた馬頭琴をつくり、それを奏でて葦毛の馬をたたえる歌を歌うようになった。[藤井 二〇〇三：二四一—二五]

(10) ケートの別伝「月と太陽」では、地上で追跡してくるのは、ホシヤダムではなく、三人兄弟のうちの兄二人を死に追いやったマイラクという死神・シャマンである。太陽の娘である妻は櫛と火打石を与えて、困ったら、それを背後に投げるようにという。マイラクが追いかけてくる。危急を助けにきた妻は夫の右手を執るが、マイラクが左手を掴んで引っぱる。両方で引っぱったため、男は二つに裂け、左半分はマイラクが持ち去る。心臓のない右半分が妻の手に残った。蘇生させるすがなくなった妻は「わたしは昼間人間を照らし、あなたの世話をしますから、わたしが休む夜はあなたが人間を照らしなさい」という。こうして、天には太陽と月が生まれたと語られる。[Алексеенко 二〇〇一：六〇—六三]。この説話は別の出典により訳がある。[齊藤 一九八八：二七三—二七九]

(11) 関は「天道さん金の鎖」の説話の前半部についてグリムの「狼と七匹の仔山羊」との関係を指摘しているが、後

半部のこの逃走譚については触れていない。しかしながら、この説話を「逃鼠譚」に含めている。「関 一九五五・一九〇一―一九二」

(12) 新潟で集められた「三枚の札」では変身逃走のモチーフのある説話は「第二タイプ」として区別され、三話が収録されている。その一話では追っ手の山ネコ大将に小僧は黒・青・赤の玉を投げて、スギの木、湖、火の鳥に変身して逃走、寺まで追ってきた山ネコ大将は火の鳥に焼かれて死ぬ。第二話では、おしょうさまの札で大山、ガンに変身して「おにばさ」から逃走、寺に戻って木魚になり、ばさまは五粒の煮豆になって和尚に食われる。第三話はグリム童話に類似。兄妹の三枚の札にはそれぞれカモ、ハト、赤子の絵が描かれてあり、変身するが、最後の一枚は実母と再会した妹の身の証になる。「水沢 一九七二・六七二―六九四」

参考文献

飯倉照平「中国の人を食う妖怪と日本の山姥―逃走譚にみる両者の対応」『口承文藝研究』第十六号、一一―一二 一九九三
萩原眞子「北東シベリアにおける『結婚したがない娘』の伝承」『環極北文化の比較研究』（一九九三 文部省科学研究費補助金 総合研究A 代表者小谷凱宣）
「メルゲンとブジの物語―ナーナイの『英雄叙事詩』」『口承

文藝研究』第十七号 一九九四

『北方諸民族の世界観―アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』一九九六 草風館

〔資料〕エヴェンキの英雄説話の2つのテキスト」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第六号 一九九七 北海道立北方民族博物館

『Magic Flight, in Tales of the Ainu and Northern Peoples. (アイヌと北方諸民族の「呪的逃走」譚)』『第一五回北方民族文化シンポジウム報告』二〇〇一 北海道立北方民族博物館

カーティン、(前田太郎訳)「蒙古の神話」一九一四(『現代のエスプリ』一九六六 至文堂所収)

萱野茂『アイヌのカムイユカラと昔話』一九八八 小学館
金成まつ、金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカーラ集』IⅴIX

一九七六(一九五九)三省堂
久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』一九七七 岩波書店

倉野憲司 武田祐吉(校注)『古事記』(日本古典文学大系新装版) 一九九三(一九五八) 岩波書店

剣持弘子「三枚のお札の成立」『口承文藝研究』第十九号、一九九六 三九―四七

更科源蔵『アイヌ民話集』一九六三 北書房
斉藤君子『シベリア民話集』一九八八 岩波文庫

- 関 敬吾『日本昔話集成』（第二部 本格昔話3）一九五五
 角川書店
- 『一寸法師 さるかに合戦 浦島太郎』（日本の昔ばなしⅢ）
 一九九五（一九五七） 岩波文庫
- 知里眞志保『アイヌ文学』一九五五 元々社
 『アイヌ民譚集』二〇〇一（一九八一） 岩波文庫
- 藤井麻湖『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』二〇〇三 風響社
- 三浦佑之『口語訳 古事記 神代篇』二〇〇六 文春文庫
- 水沢謙一『黒い玉・青い玉・赤い玉』一九七二 野島出版
- 若松 寛（訳）『ゲセル・ハーン物語 モンゴル英雄叙事詩』（東
 洋文庫）一九九三 平凡社
- Arne Antti & Thompson Stith 1987 *The Types of the
 Folkale, Helsinki*
- Алексеевко Е.А. 2001 *Мифы, предания, сказки кетов.
 Москва*
- Bogoras W. 1902 *The Folklore of Northeastern Asia, as
 Compared with that of Northwestern America. American
 Anthropologist, vol.4, No.4*
- Chamberlain B.H. 1888 "Aino Folk-Tales, (in *The Folk-
 Lore Society Publication, 22*), (K.Refsing ed.) *The Ainu
 Library Col.4 (Early European Writings on Ainu Culture
 : Religion and Folklore)*, Routledge Curzon, 2002
- Jochelson W. 1908 *The Koryak. The Jesup North Pacific*

- Expedition. Vol. VI, Leiden-New-York
- Laufer B. 1900 Preliminary Notes on Explorations among
 the Amoor Tribes. *American Anthropologist*. Vol.2
- Lorain I.A. 1933 Tales from the Amur Valley. *The
 Journal of American Folk-lore*. Vol.46. No.181
- Е.М.Меновицков 1974 *Сказки и мифы народов
 Чукотки и Камчатки. Москва*
- Романова А.В и Мырзева А.Н. 1971 *Фольклор эвенков
 Якутии. Ленинград*
- Штернберг Л.Я. 1908 *Материалы по изучению
 гилиякского языка и фольклора. С.-Петербург*
- Thompson Stith *Motif Index of Folk Literature*. vol.1-6,
 Bloomington & Indianapolis

(おぢはふ・しんご)／千葉大学)